

平成31年 / 月22日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人 日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201880227
氏名 詹詔千惠

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先: 都市名 台北 (国名 中華民国)
2. 研究課題名 (和文) : 近代中国における学校行事の形成と展開
3. 派遣期間: 平成 30 年 4 月 4 日 ~ 平成 30 年 12 月 30 日 (270 日間)
4. 受入機関名・部局名: 中央研究院近代史研究所
5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

派遣先では、おもに博論の資料収集を行い、近現代史に関連するさまざまな研究会に参加することができた。これらの活動をもとに、2018年12月24日、「近代中国学校運動会的出現與興起」という発表を近代史研究所においておこなった。資料収集に関しては、研究計画に基づき4月から5月にかけて、国史館で清末期に設立した学部の学校に関する資料などを入手し、故宮博物館の文献館にて清末の修身、歴史、国語教科書、および清末の外交档案などを調査した。また、国家図書館、台湾大学などにおいて、関連資料および修士論文・博士論文などを閲覧した。このほか、派遣先である近代史研究所の図書館、档案館などを利用して、数多くの研究資料を入手することができた。

中国の近代教育における西洋の影響を明らかにするため、2018年10月から11月にかけて、キリスト系教会学校の資料を大量保存している School of Oriental and African Studies (ロンドン) にて資料調査をおこなった。この調査によって、近代中国教育改革との関連性について重要な手がかりを見出すことができた。しかし、その資料のほとんどは手書きであり、短時間で解読することが困難なため、その全貌を解明することが今後の研究課題となる。また、この資料調査のついでに、ケンブリッジ大学の Faculty of Asian and Middle Eastern Studies で開催セミナーに二度参加して発表を聞いた。一度目は 2018 年 10 月 22 日に行われた Global History as Urban History: A View from Edo, The Greatest City in the World という発表であり、二度目は、11月5日におこなわれた近代史研究所受け入れ教員による発表 Between Friends and Enemies: Chang kai-shek's triangular relationship with Japan and the Chinese Communist Party である。これらのセミナーへの参加を通して、日本と異なる研究方法を知ることができた。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

派遣先でおこなった調査において、アヘン戦争以降中華民国政権が台湾に移行するまでの間の各メディアに掲載されていた学校運動会に関する記事、および清末の修身、歴史、地理、国語教科書を網羅的に収集したので、博論における近代国家の「身体訓練」と「衛生学」の導入についての考察をより深めることができることになった。これらの考察は、2019年8月に中央研究院が開催する2019中央研究院国際学術研討会で発表する予定である。また、博論に植民地時代の台湾で行われた学校運動会の実態と、日本本土で行われた運動会との比較内容も日本の影響に加える予定である。

本プログラムにおける資料調査は、これまであまり注目されていない近代中国学校の儀式、主に入學式と卒業式の変遷について日本の影響に関する一次資料を数多く入手した。近代教育改革の前には、各書院や塾などでは、儒教の「禮」を中心とし、すべての儀式がそれに関連するものであった。しかし、20世紀初頭における近代学制の導入によって、従来の社会階層の順位や、服従などを強調する「禮」の儀式が、近代国家の国民育成に適応しなければならない。この転換も、「身体訓練」の一種であり、この転換過程を明らかにすることは、近代中国の教育改革と国民形成の関係を解明するのに非常に重要なことであると思われる。

「禮」と近代中国の学校行事の関係については、2019年9月に静岡大学で開催する教育史学会で発表する予定である。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本プログラムの派遣においては、まず、日本に無い近代中国教育に関連する資料を数多く入手した。中央研究院近代史研究所には、世界的に有名な学者達が集まっており、私の研究について、つねに議論と指導を受けることができ、世界中の研究機構から派遣してきた研究者たちとの交流も頻繁におこなった。もっとも大きな収穫は、派遣期間で得た研究資料を利用して、2018年12月24日に同研究所で、「近代中国学校運動会的出現與興起」を発表したことである。この発表に対し、受け入れ先の研究者をはじめ、日中近代史研究および近代ジェンダー研究分野の数多くの教員・研究者たちが興味を示し、様々な質問や指導をいただいた。また、同研究所で研究をしている近現代史領域の仲間たちからも、大変有益な助言を得た。

また、派遣先である中央研究院の近代史研究所のみならず、歴史研究においてもっとも古く、傅斯年氏ら創設した歴史語言研究所や、人文社会研究所、中国哲学研究所などでも、大規模な国際学会や、著名な研究者の個人講演会などが頻繁に行われている。それらの大規模な国際学会に出席することによって、自分の研究分野の先生方をはじめ、世界各地からやってきた学者との交流が実現し、研究の視野が相当広げられた。また、世界各地の東洋史研究者とのネットワークを作り上げることもできた。

最後に、イギリスの School of Oriental and African Studies での資料調査はもちろんのこと、ケンブリッジ大学のセミナーに参加することによって、欧米で活躍している歴史研究者との交流を実現した。それらの研究者たちとの議論を通して、欧米学界における歴史研究の方法とその動向を掴むことができることも、本プログラムにおいて大きな収穫の一つである。